

この夏、彼に依頼した原稿のことで、三度ほど盛岡療養所を訪ねたり、電話でながながとしゃべったりしたのだが、思えば、画家の大宮政郎といっしょにお礼をかねて会いに行つたのが最後になつた。

彼は会うたびごとに、夜眠れないこと、眼がかすんで本がよく読めないことをしきりに口にした。療養所の総合病院化の工事のために、重症の人たちが同室に移されてきて、衣も看護婦や医師の出入りが多く、とてもゆつくりと休めないこと、そして書くこともなにもできないということ、だからもう、本やその他の荷物も全部いってよいくらい家に返したと、家に帰りたい、家に帰りたいというようなことへ話がうつつていくのだった。「医師や看護婦がよく面倒をみてくれるので、むしろ監視されているような気がして動きがとれない」と感謝ともグチともつかない口調で、被害妄想的な話をしていたことも忘れられない。

ぼくとしては、病気のほうはずつかり治つていることをだいぶ前から聞いていたので、眼がかすむということにそれほどの現実感もなく聞き流していたのである。うかつといえはまったかうかつな話であった。それほど彼が衰弱していたとはとても思えなかつたからである。

あとで、彼の日記について弟さんから聞いた。

それは、だんだん彼の眼が見えなくなっていく度合いに応じて書く文字が大きくなり、ついには万年筆にインクがなくなつたこともわからず書いていて、ペン先がノートに刻みつけた線だけになつていくという。そしてそれが、二日も三日も同じペーじにダブつていくというのである。

ほとんど眼が見えなくなつていたのにちがいない。それでもなお、彼は何を書こうとしたのか。

石に言葉をきざむ

休むことなく言葉をきざむ

石に言葉をきざむことは

何時からか私の仕事になつたのだ

此処に私の意識があつたと

此処に炎が燃えてあつたと

砂ならば何れは崩れるから

水ならば何れは流れるから

石に言葉をきざむ

億万年の言葉をきざむ

石に言葉をきざむことは

何時からか

私のかなししい仕事になつたのだ

——石に言葉をきざむ

ぼくは、たとえばサハラ砂漠の岩に刻みつけられている先史時代の重層化した刻画や、聖なる石に刻まれたエジプトのヒエログリフを思い出す。そしてまた、「病死の間際まで、船中に仰臥したまま、辛うじて、ミミズのような文字で、毎日の体温をしるしていた」二葉亭四迷の『体温日記』のことなどを思い起こしながら、人間の最後の自己表現、意味の解体ともうひとつの言語世界について考えさせられるのである。

そこには言語表現の極限が暗示されてはいなかつただろうか。村

上昭夫の内部を流れた暗黒と光りの深いひろがり、「あらゆる生命を、恒常不変にして絶対的な価値の言語へ移入しよう」として苦しんでいた、ほとんど盲目の修羅に似た孤独の執念を、どのようにして語りつくすことができるというのか……。

三月の末だったろうか。H氏賞の連絡や詩集のことで、県詩人クラブの大坪孝二と訪ねたときには、しかしまだまだ元気であった。夜だったので、久しぶりに落ちついた話が出来た。

彼は何年か前に盛岡市内の古本屋で買ったのだという動物図鑑をみせて、「これが動物哀歌さ」といった。一万編の詩作をねがっていた彼であったが、こんな資料？を持っていたことを教えてくれたのは初めてである。そのあと、仏教や愛読しているシバレンの小説についてのひとくさりなど、いつになく一方的にしゃべりつづけ、「H氏賞なんてなんのことかさっぱりわからない」などともいって、ぼくらを煙にまいた。

たまたま、パリからとどいたばかりでぼくが持っていた空間詩派の雑誌『APPROCHES』をみせても、「これ、盛岡で刷っているの？」というようになり、こちらが早々にひっこめて、また、彼の話を聞かされるという状態であった。

彼もよほどうれしかったのだらう。これもあとで聞いたのだが、数日後、自宅へ帰ったとき、夫人や家族の人たちにかこまれてその人たちの心配もよそに、夜おそくまでひとりしゃべりつづけていたという。

『賞』は、いかなる賞であれ、はかなく、むなし。そのあと作品だけが幾年が残るかもしれない。けれども、その作品でさえいはず

れは空しいことになる。…それなら一体ほんとうにたよれるものはないか。」と書き、「やはり今までどおり『死』という暗く悲しくつらい色をした、もつと強度な眼鏡をかけなおして、ふたたび耐えがたい旅に出る」よりほかはなかつた彼のことを思うとき、その認識のなささと現実のよるこびの落差が大きければ大きいほど、あのジヤコメッティの彫像のように細く天にむかっていた、彼の姿をいっそうさびしく浮彫りにするのである。

ふりかえってみると、昭和二十六年の夏、盛岡市の郊外にある岩手サナトリウムでの出会いから、もう十七年という時間がながれているのだった。

しかし、彼の仕事の大部分は、昭和二十九年から三十四年にかけてのおよそ五年間に集中していることがわかる。

北上市で発行されていた詩誌「首輪」を母胎にして、二十九年に岩手県詩人クラブが発足し、その会員となった彼は斎藤彰吾をはじめ、佐伯郁郎、大坪孝二、大村孝子、中村俊亮、宮静枝その他の多くのメンバーと交流するようになり、また岩手日報紙上に新設された日報文芸への意欲的な投稿をはじめたのである。日報文芸の詩の選者は草野心平氏から村野四郎氏へとひきつがれていった。盛岡市の詩誌「首輪」に動物哀歌と題するシリーズを発表しはじめたのは三十四年。この間、県詩人クラブの主催で毎年ひらかれていた岩手詩祭には詩劇の主役をとめるなど、彼は積極的な働きをみせていた。

当時、盛岡に迎えた詩人には及川均、山本太郎、秋谷豊、江間章子、長谷川龍生、木原孝一、村野四郎、関根弘各氏がおおり、県詩人

クラブのもっとも熱氣と刺戟にみちていた時期であつた。この頃が、彼のいちばん元気だったときとふしぎに重っている。

もちろん、仙台の厚生病院を退院してきた昭和三十八年の夏から三十九年にかけて（この時期に彼は詩集「動物哀歌」の原稿を清書したのであるが）非常に快調だったひとときがある。

だからというわけではないが、彼がもういちど元気になつて、もっともって現実社会の泥によごれながら詩作したならば、さらに大きくアクチュアルな世界を未知のサファイヤのようにみがきあげてくれたのではないか。ときとして気になる、あのあきらめの念をうちくだくことができたのではないか。彼もまた「人間がその外的な運命よりも内的に一層強くあり得ることの証人」のひとりであるとしても、である。

万物の上をやがてきたるべき世界のための祈りであり、村上昭夫の「死者の書」ともいえる「動物哀歌」の一冊を前にして、ぼくにはいま、「女が裸になる前に／ぼくには行かなければならないところがある」という彼の詩句の一節がこだましている。